

小学生の部 特選

飛驒市立古川小学校 六年 井畑晴仁

ぼくの家には蔵がある。この蔵は、井畑家三代目石之助大じいちゃんがつくったのだ。実は、井畑家は明治三十五年、古川町初の水力製材所を開いたのであって、そのときに木をひいて手づくりしたものであり、ぼくにとっては格別な蔵なのである。この夏休みとても暑い日が続いた。そんな中、この家の中で一番涼しかったのはこの蔵だった。そして、なんだか蔵にいととても落ち着く。今年の夏休みはサッカーの遠征が毎週あった。そんな中、いつも心をケアしてくれるのは蔵だった。

蔵の中に入ると、裸電球がいくつかが光っている。周りを見回すと、大小の箱や祭りの道具がたくさん置いてある。そして、その大はんは昔の言葉で文字が書かれてある。ぼくはまだ開けたことのない箱を一つ一つ開けて中を見る。それが僕の夏休みの楽しみの一つだ。まるでプレゼント箱を開ける時のような胸の高鳴りだ。それは、一つ開けると同時に、新たな発見とまた一つ先祖に近づけた気がするからだ。

この夏一番おどろいたものを二つ紹介しよう。一つ目は、足付きのおぜんの木箱の中から「陸軍歩兵井畑與四郎君」と墨で書かれた、たれ幕という旗の一種がでてきたことだ。これは、四代目井畑與四郎大じいちゃんが陸軍に行くときにかかげて祝ったと考えた。

二つめは、仏様の絵がかいてあるまき物の後ろにかくれていた、與四郎大じいちゃんが戦争中、身につけていったきんちやくぶくろだ。中には、戦争のバッチや手帳、手紙が入っていた。自分の先祖も戦争へ行つたことを知り、おどろいたし、信じられなかった。ぼくは、ぼうぜんとした。ぼくは一しゅん蔵の中にあることを忘れていた。

この蔵は、まるで新しい世代に向かって、歴史を語っているようだった。そして、これからも未来へ語り続けるのだろう。